

序

現在、大学病院でレジデントや若手臨床医の教育の一部を担当しているが、心電図は苦手だ、読み方がよくわからない、という声をよく耳にする。この原因として、心電図は心エコーや冠動脈造影などの画像検査と違って、異常を目で見て確かめることができないことが影響しているのかもしれない。しかし、心疾患の診断は、たった1枚の心電図から始まるといつても過言ではない。心疾患に限らず、他の内科疾患の診断においても心電図は必要な検査のひとつであることが多く、また外科的治療を受ける患者においては術前検査として心電図は必ず記録される。突然死をきたす疾患のなかには、心電図さえ記録しておけば、それを未然に防げるものも少なくはない。

好きこそ物の上手なれと昔からよくいうが、「心電図は面白い」と自分に暗示をかけて、その扉を開けて一歩進むと、非常に多くの面白さを秘めた世界がこの心電図にはある。また、心電図は考え方によつていくつかの解釈ができるため、理論立てて十分に説明ができるれば、レジデントでも上級医と十分にディスカッションすることができる。心電図を理解する上で1ついえることは、レジデントの頃は検査技師や看護師にまかせきりにしないで、なるべく自分で心電図をとることである。電極の付け間違いや肋間の違いによる心電図変化など、学ぶべきことはたくさんある。ぜひ、率先してとることを勧める。

レジデントに心電図をもっと理解してほしいという願いをこめて、この度レジデントノート増刊号として「心電図の読み方、診かた、考え方」を発刊することを企画した。本書は、好評であったレジデントノート本誌2007年6月号（特集「研修医のための心電図の読み方入門」）をベースにしている。「心電図が好きになる！」「心電図がきっと読めるようになる！」を目標に、心電図の読み方・診かたを前誌よりもさらにかみ砕いて解説している。文章は短くし、心電図を大きくして、図を多用するなど、視覚的に受け入れやすいように工夫した。第1章では「心電図の読み方入門」として、これから心電図を学ぶレジデントに心電図の基本を徹底的に分かりやすく解説しており、心電図判読のための扉と位置づけている。第2章では「症例からみた心電図の読み方【基本編】」として、前期レジデントに役立ち、また、臨床で遭遇することの多い症例を選定して、心電図の読み方のポイントを解説している。第3章では「症例からみた心電図の読み方【アドバンス編】」として、後期レジデントや非循環器専門医にも役立つ症例の解説を行っている。このように個々のレベルに応じて心電図診断のスキルアップができるような構成にもなっている。

ぜひ、本書を十分にご活用していただき、心電図の読み方が得意になり、将来は心電図診断のエキスパートになっていただければ、企画した者としてはこの上ない喜びである。

2010年2月

池田 隆徳